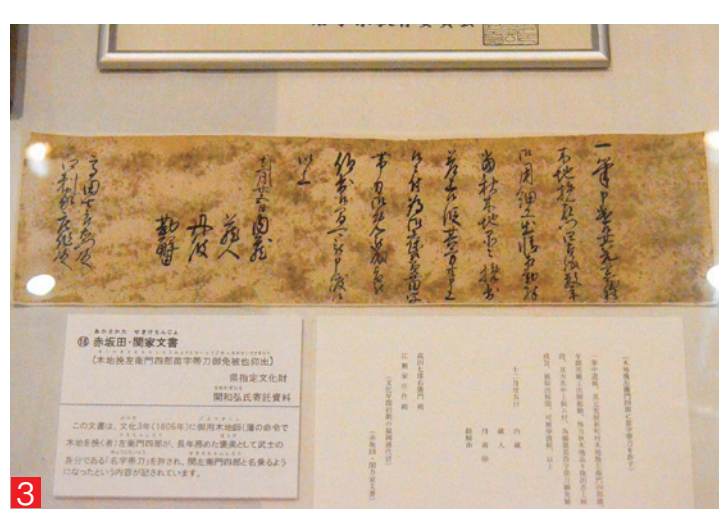
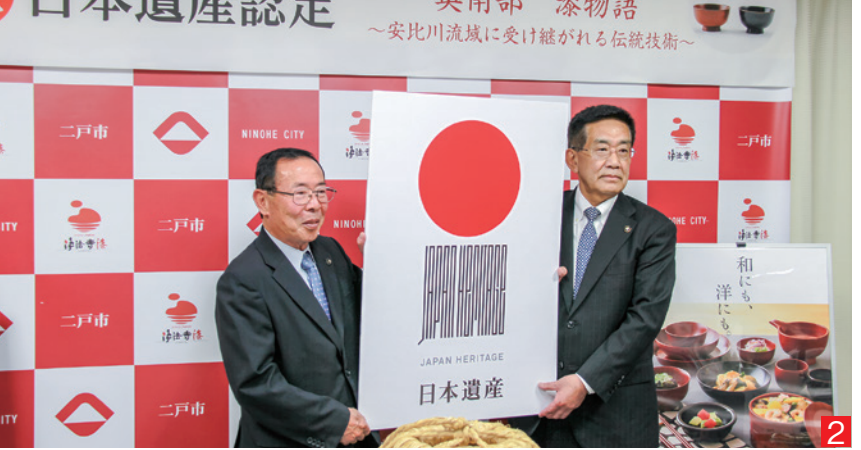




日本遺産認定ストーリーNo.85「奥南部」漆物語 ～安比川流域に受け継がれる伝統技術～

日本遺産 後世に

文化庁が認定する「日本遺産(Japan Heritage)」に、本市と二戸市で合同申請した「奥南部漆物語～安比川流域に受け継がれる伝統技術～」が令和2年度に日本遺産に認定されました。本号では、2月13日の日本遺産の日に合わせて、安比川流域に受け継がれてきた漆文化と、それを後世に伝える活動をお知らせします。

■問い合わせ先 文化スポーツ課生涯学習係 ☎・内線1143

冬の安比川(五日市橋から撮影)

1 八幡平の黒谷地湿原にある安比川の源流 2 二戸市役所で行われた記者会見で認定を喜ぶ 3 市博物館で常設展示される「赤坂田・関家文書」 4 手作業で一つ一つ丁寧に漆を塗る塗師 5 漆の木から漆を掻いて採る漆掻き

受け継がれてきた「漆」の文化

本市と二戸市を流れる安比川。その流域は、上・中・下流域ごとに木地師、塗師、漆掻きの文化が栄え、それらが一体となって漆器を製作していました。日本遺産に認定された漆文化とは、流域ごとの役割とは。

日本遺産とは

文化庁が、地域の歴史的魅力や特色を通じてわが国の文化・伝統を語るストーリーを日本遺産として認定するものです。文化庁は平成27年度から令和2年度までに100件程度の認定を行うこととしており、2年度は全国で69件あった申請のうち21件が認定されました。これまで6年間で、104件のストーリーが認定されています。

認定されたストーリー

本市と二戸市が合同で申請していたストーリー「奥南部漆物語～安比川流域に受け継がれる伝統技術～」が2

た錢で納め、盛岡藩の財政基盤の一つとして重要視されていました。その流域ごとの役割は次の通りです。

■上流域

豊富な森林資源を基に木地作りが盛んに行われた地域です。畑地区は当時、藩の御用木地師である関家を中心とした木地師集団の集落で、旧暦2月(現在の3月ごろ)になると、安比岳や鍋越の山小屋に1週間ほど泊まり込んで伐採をしたといわれています。伐採した木材から器などを削り出す木地挽きは、昭和の初めごろに水車くろろが普及するまで、手挽きくろろの使用が主流でした。市博物館で常設展示している

■中流域

中流域に位置する荒屋新町、浅沢地区は塗師が多く存在した地域です。上流域で生産される木地を市日(毎週4のつく日)に購入し、下流域で採れる良質な生漆を精製加工したものを塗って漆器を作っていました。プラスチックや化学塗料が普及したことにより漆器産業は衰退しましたが、旧安代町が昭和58年に漆器センター(現安代漆工技術研究センター)を開所し、多くの研修生を受け入れて塗師の育成に力を入れてい

■下流域

浄法寺地域では古くより良質な生漆が採れたため、漆掻き職人が多く存在した地域です。浄法寺漆は、中尊寺金色堂や日光東照宮の陽明門など、日本を代表する国宝建造物の修復に使われ、日本の文化を支えています。





安比塗漆器工房
塗師

工藤 理沙 さん (42) = 曲田横間 =

文化は町の魅力に
深みをつくる

19年前に奈良県から移住してきました。高校生のときに伝統工芸に興味を持ったことをきっかけに大学で漆と出合い、その面白さ・奥深さに引かれました。漆に生涯携われる仕事に就きたいと教授に相談した

ところ、岩手県安代町を薦められ、安代漆工技術研究センターでの2年間の研修を経て塗師になりました。漆器を使って感じるのは北国の生活に合っていることで、ガラスや陶器、プラスチックの器と比べて保温性が高く、熱いものを注いでも器を持つ手には柔らかな温かさが優しく伝わります。また口当たりが良く、使っていて心地

良いのも特徴です。縁もゆかりもない所からつながった縁を次代につなげるため、この仕事に夢を持ち、漆に携わりたいと思ってもらえるような活動に力を入れていきたいです。文化は町の魅力に深みをつくります。自分の生まれ育った町の文化に誇りを持つための一つになればと考えています。

漆文化をつむぐ人たち

時代を重ねるごとに薄れ、記憶から消えていってしまう「昔の当たり前」。文化や伝統も、人々が意識しなければ時代とともに失われてしまいます。漆文化を守り、残し、後世に伝えるために活動する人たちの声を聞きました。



浅沢地域振興協議会
会長

齋藤 政四郎 さん (69) = 浅沢第2 =

住民が胸を張って
地域を誇れるように

私の祖父も、地元浅沢で塗師・木地師をしていました。私が子どもの頃、浅沢のどの家にも漆室（漆を塗り、乾燥させる作業小屋がありました。それほど、浅沢には多くの塗師が住んでいたのです。しかし、

それも岩屋地内の小山田家に唯一残るのみ。浅沢で漆器生産が盛んに行われていた歴史を伝える証拠が失われてしまいう危険を感じていたところ、3年度の日本遺産事業で小山田家の漆室移設が決まり、浅沢地域振興協議会で事業を請け負いました。解体、建築、土壁塗りまで移設に関する全ての工程を浅沢住民の力で実

施。1日10人を目安に8月末から10月末の期間、29日間の作業に延べ223人の住民が携わり、地域一体となって団結し、移設を完了させました。後世に古いものを残し、言い伝える。住民が胸を張って地元を誇れるように、日本遺産認定や漆室移設をきっかけに、今一度、地域に漆文化を認識・浸透させたいです。

知る、伝える活動

漆文化を見つめなおし、観光客に向けて発信するために本市独自の啓発活動の他、二戸市と合同で活動を行っています。ここでは、その活動の一部を紹介します。

漆室の移設

日本遺産の観光拠点整備事業を活用し、市内で唯一現存していた漆室の移設を浅沢地域振興協議会が行いました。



移設した漆室

ワークショップ

安比川流域の歴史や食文化、自然環境などの魅力を見つめなおすワークショップを二戸市と合同で開催し、荒屋、五日市、浅沢地区の住民が参加しました。参加者は、後世に残すべき地元の「宝」を自然・生活環境・歴史文化・産業・名人の5つのテーマごとに付箋に書き出して模造紙に貼り付け、地図に宝の場所の印を付けて見え

NIE授業

Newsaper In Education
(教育に新聞を)を目的に、岩



宝を書いた付箋を旬な月ごとに貼る

る化しました。地元の宝を共有し、地域にシビックプライド（愛着と誇り）を持つ活動として実施しました。

ガイド養成講座

地域に伝わる漆の文化や歴史を学ぶガイド養成講座やモニターツアーを開催しました。また音声ガイドやプロモーション動画の制作など、観光客の受け入れ環境の整備を進めています。



さまざまな種類の漆器の説明を受ける参加者

後世へ

安比川流域は原材料から製品までを一つの流域で一貫して生産できる、全国的にも希少な漆器の生産地でした。脈々と受け継がれてきた漆文化は、紛れもない地域の宝。この宝を次の世代につなげていくためには、文化を知り、後世に伝えていく必要があります。今回、「奥南部漆物語」安比川流域に受け継がれる伝統技術「のストーリー」が日本遺産に認定されたことは、市内外を問わず多くの人たちに安比川流域の漆文化を知ってもらう契機となるとともに、漆器の良さを知ってもらうための確かな足掛かりです。まずは私たち住民から漆文化を再認識し、理解を深めてみませんか。地域のことを知ると、シビックプライドが芽生えます。私たちが胸を張って地域を誇れるようになれば、地域はさらに活性化します。文化や伝統を受け継ぎ、後世につないでいくことは、私たちの古里八幡平市の活性化につながります。